

# とぎとば、辛口

17

## ◆ 芹沢光治良と 『明治六十六年』



松本道介  
Matsumoto Michisuke

### 小説「人間の運命」

思わぬところで七十数年前の中央大学に出合った。

去年の暮に芹沢光治良（一八九六—一九九三）の小説「人間の運命」を読む機会があり、この小説の中で出合ったのである。

「人間の運命」は長命の作者の十四巻からなる自伝小説で明治末期から大正、昭和の戦前戦中までをどう生きたか、またそれがどのような時代であったかを克明に書いている。

芹澤は沼津で生まれたが、父親が天理教に帰依したため一家離散、三男の光治良は貧し

い祖父母のもとで育った。

小学校を終えると漁師になるしか道はなかったのだが、光治良の性格と才能を見こんでお金を出してくれる人が次々にあらわれて、中学、旧制一高、帝大（東大）へと進み、今の公務員試験上級職にあたる高等文官試験にも受かって農商務省に入る。しかし上役と合わなくて休職し、結婚したばかりの妻の父親である実業家の援助でフランスへ留学……という具合に運命が開けてきて、「人間の運命」というタイトルにふさわしい人生が展開して行く。

しかしフランスで芹澤光治良を待っていた

のは、その頃なかば不治の病であった結核にかかるという運命であった。スイスのサナトリウム（結核療養施設）に入ったが、そう簡単に治るものではなく、小康を得たところで日本へ帰り、この時の体験を「ブルジョア」と題した小説に綴る。雑誌「改造」の懸賞小説に応募したところ一等になり、それまでは思いもよらなかつた小説家への道が見えてくる。

一方、小説の懸賞に当選する前の芹澤は無職だったから、少しでも自力で生活して妻子をやしなうことを考え、フランスで学んだ貨幣論を或る私立大学の経済学部で非常勤講師として講義していた。

### 「わが中大の講師が小説など…」

ところが、その大学は芹澤（小説の中だと島次郎）が、新進の作家として注目されているのを知って講師をやめるように言ってくる。しかし彼が退職願を出す気配もないので、学長室に呼びつけられた。

学長は言うのである。「君は承知しているだろうな、わが大学の学生は真面目で……小説を読む暇があったら、六法全書をひらけと、

いつも訓示していますよ。そのために、司法試験では、帝大の卒業生よりも、いい成績をとっているからね」と。

これに対し主人公は、講師としての講座料だけでは食べていけないので、趣味として書く小説で、不足を補なうつもりなのだと抗弁したが、学長はいささかも同情を示さない。

「君、わが中央大学の経済学部が先生が、小説を書く……新進作家だというような不真面目なことを、学長たる私は認めるわけには行かん——」

もつとも、当時の学内では帝大出身の先生と母校出身の先生の対立がかなり激しくあつたらしいし、貨幣論を聴講していた学生たちは「先生、頑張つて下さいよ」と同盟休校もやりかねない勢いだつたが、芹澤は結局講師を辞任してしまった。昭和七年のことである。

「人間の運命」でこのあたりを読んだとき、私はながらく文学部にとめた人間であるせいか、へえ、この時代には小説ってそんなに面白かつたのかという感想がまず頭に浮かんだ。一年ほど前の最終講義でも、この百年のあいだにいかに小説がつまらなくなつたかという話をしたばかりだし、今では文学部に於

いてさえ、教室で「これこれの小説を読んでほしい」と教師が言つてもなかなか読んでもらえない時代だからである。

小説がつまらなくなつたことは以前にもこの欄に書いた。五十年前ならモームやヘッセやヘミングウェイなど、文学部だけではなく学生一般に名を知られた作家が何人もいたのに、今や世界的に名前を知られているのは「ハリー・ポッター」だけという時代になつたことも書いた。

どうしてこうなつてしまつたのかは、話せば長くなるので、ちよつと視点を変えて、今から七十数年前の昭和七年に目を移そう。当時の小説が面白かつたか面白くなかつたかはどうもかく、他に面白いものがなにもなかつた時代らしいのである。

### 文士の地位の低さと大学の権威

まずはテレビがなかつた。映画とて弁士つきの無声映画の時代である。パチンコ屋もないし、むろんテレビゲームもない。プロ野球もプロサッカーもない。学生たちは下宿で火鉢にあたりながら小説でも読むくらいしか楽しみはなかつたのだらう。

それに小説家の社会的地位が徹底して低かつた。教師が副業に小説を書いたことで大卒をやめさせられただけではない。何よりも主人公の妻の実家から苦情が出てきた。親族に小説家がいるのでは、妻の妹たちの結婚にもさしつかえるというのである。

しかし妻の妹たちはすべて異母妹なのだった。つまり妾腹の妹たちなのである。妾腹というところは社会的に低く見られるが、当時はそうではなかつた。実業家にとつて妾を持つのは成功のあかしだったのである。

昭和七年というのは私の生まれる三年前、昭和がついてるので私など比較的最近のように思っていたが、明治でいえば明治六十六年であり、江戸時代生まれの人がまだかなり生きていた。大正天皇のご生母とて側室であつたし、江戸時代、明治時代的なものはまだ濃厚に残っていた。

となると、小説家つまり文士の社会的地位が低かつたのも素直に納得が行く。これに較べると大学なるものの権威は今よりずっと高かつたようだ。

(中央大学名誉教授)